

責任役員

この春、護王神社の責任役員を拝命いたしました。

数年前より総代は務めてまいりましたが、私にとつて驚天動地の出来事でありました。このような役目は何をすれば良いのか皆目見当が付きなく、戸惑うばかりであります。

とにかく責任役員ですから、今のところ神社の行事にできるだけ参加をして、責任を果たしているような状況です。護王神社には、京都市内の多くの神社がそうであるように、氏子が一人もありません。氏子がおられたならば、私のような者がこのような立場にはなれなかったでしょうし、ある程度の経済的基盤もあったのです。

護王神社は明治一九年に別格官幣社として、高雄の神護寺境内に祀る霊社より現社地に遷座されたのです。主祭神は和氣清麻呂公と姉の広虫姫様です。清麻呂公は道鏡事件や平安遷都、水利事業に功績を残され、広虫姫様は孤児の養育事業をなさいました。再来年には遷座・創建一三〇年を迎えます。このように由来ある神社ですが、戦後はすっかり荒廃し、つい十数年前までは参拝者もわずかで、一日の賽銭も千円に満たなかったと聞きます。

現在の文室宮司が赴任されてから粉骨碎身の努力があつて、今日のような足腰の守護神・護王神社に生まれ変わるのです。和氣清麻呂公が道鏡事件で投獄され、足腰を悪くされた後、九州に配流となり、多くの猪に助けられて足腰が回復する故事に因んでのことなのです。今や全国各地から足腰のお守りを求めて殺到する有様です。それだけ大勢の足腰を病む方がいらっしゃるのです。

数年前から神社では、毎月二十一日に足腰祭を斎行されるようになりまして。最初は二・三十人程度のお詣りでしたが、ここ数年で二・三百人に増加しております。此の分ではもう数年もすると少なくとも五百人くらいのお詣りがあるでしょう。そうなりますと、狭い境内ですから収容しきれなくなりそう、嬉しい悲鳴です。このように護王神社は現代の人々の苦悩によって蘇ったのです。

つまるるところ神は、人々の認識と自覚の所産であることを物語っていると言えます。これからも責任役員として神にご奉仕できますこと有り難く、心が浮き浮きして参ります。

澤野道玄



2014年
7月号
Vol.16

文化に浴して…円熟境地

圓塾便り

コンコンチキチン

コンチキチン街中が、連日お囃子の練習の音色に包まれていました。

皆さま、お変わりありませんか？時の流れは早いもので、今年も半分が過ぎましたね。ちょうど一年の折り返し地点。

山の折り返し地点を「峠」と言いますが、昔、旅の安全を祈り、災いが入ってこないようにと、峠には必ず道祖神を祀ったそうです。

道祖神への「たむけ」(供え物)が「とうげ」に変化したとか。

今年もします圓塾祇園祭。もしよろしければ！



折り返し地点のちょうど今。今年の旅路の残り半分を、一緒に祈りましょう♪ お祭を楽しみながら♪

ご存知の方も多いと思いますが、今年も四九年ぶりに古来の祇園祭の形態が復活する記念すべき年。巡行が一七日と二四日の二日間に分けて行われるようになるのです。

前祭(サキマツリ)と後祭(アトマツリ)。両宵宮に宴をします。ご都合の良い方、ぜひ、お誘いあわせの上、遊びにいらしてくださいね。詳しくはチラシをご覧ください。お待ちしております。いま〜す♪

澤野ともえ



夏至・・・水無月

夏至を迎えるとなると、市内の神社のそこかしこで、夏越しの大祓が行われます。茅草でつくられた大きな輪が境内に備えられ、正月から六月までの罪・穢れを、この茅の輪を三回くぐり抜けることで祓います。

私ごとで恐縮ですが、この時期になると、決まって小学生当時の自分が思い浮かびます。亡き母が「今日は水無月を食べる日やでー」と、目を細めて小さな三角形のういろを出してくれました。おやつなど無かった時代ですので、たいそう嬉しかった記憶が蘇ります。

菓子匠が多い京都では、月々を象徴する和菓子があります。花より団子が本音です。夏越しの神事よりも、その上品な和菓子に舌鼓を打ち、しばし非日常のぜいたく三昧を感じる今日この頃です。

六月下旬執筆 田中久雄

編集後記

今号は編集者をチェンジしてみました。シリーズものの取材と記事原稿おこし、紙面の校正を経て発行へと、小学校時代の壁新聞発行以来の仕事で、悪戦苦闘した次第です。

不出来なところは手前味噌な言い訳でご容赦願うとして、梅雨が明けますと京都には、祇園祭から大文字の送り火までの本格的な猛暑が到来します。何卒くれぐれもご自愛の上、ご活躍ください。

秋には圓塾さあくる講座「浴外放浪譚 第三話 さかもと折り返し」でお会いしましょう。

編集 田中久雄



「コラム」文化の実相」第五弾

「文化財が放つ醍醐味」

先日、購読している新聞の地域総合欄にオヤツ?と思わせる記事を偶然見つけた。それは全国各地の自治体が世界文化遺産登録申請に浮き足立っているとのこと。

最近も群馬県のレンガ作りの製糸工場が登録される見込みになっただけで、それを目当ての観光客が一月間で十万人八千人(通常月の3.4倍)に及んだという。ご当地では早速、蚕そっくりなチョコレートや絹を使った化粧品などを売り出し、いずれも完売の盛況から増産体制を組み始めている。

文化財が地元の産業経済にプラス効果を挙げる例は枚挙にいとまがないが、果たしてこんな事で浮かれていますか、果たしてこんな事で浮かれていますか、別な意味から、もの悲しくなりました。

くだんの製糸工場は明治政府の富国強兵、殖産興業策のありを受け、官営で企画された当時を代表する「近代工場」。それを支えたのは貧しい山村からかき集められた女工達の命を落とした辛苦であった。

当然、文化遺産に指定された根拠

もその点にこそある訳だが、文化財価値を何に見出しているのかが疎かになっているように思われてならない。

文化財指定を広告塔扱いに終わらせているような我国の文化財保護行政の脆弱さといえ、文化財の真髄に触れ合おうとして集まった大衆を、衆愚の極みのように報道するマスコミの姿勢に、文化度の貧困さそのものを垣間見るようで、たいそう不愉快な気分になった。

私達は常に文化財としての尊厳をいづくに見出すかに留意しないと、いつまで経っても文化浴の醍醐味を味わえずに残されてしまう。

折角足を運んでも、客寄せパンダにあしらわれた疲労感だけが残るようでは惜しい。

文化財の背景にはその時代を駆け抜けた多くの人々の暮らし向きや生き様の実相が宿っている。ここを感じ取って来ないと、文化財鑑賞の醍醐味を味わったことにならないのではと思う今日この頃である。

田中久雄